

## 展覧会について

「静けさは力である」。誰の言葉であったかは失念したが、ドラクロワに強い印象を与え、印象派の作家たちにも影響を与えた19世紀のイギリスの風景画家ジョン・コンスタブルについて語ったものの中の一文である。もちろん、ここはコンスタブルや、風景画の問題について語る場ではない。ただそれは、今回は「静謐」であるという森本太郎の話を聞いたときに瞬時に浮かんだ言葉であった。

表現者が、何をもって「静けさ」を見せるか、あるいは感じさせるかはさまざまであろう。表現の押しつけがましさが無いものを、「静けさ」と言うこともできるだろうが、森本の場合、押しつけがましくないけれども、それとはまったく異なる。対象を無化していくことによって、見えざる本質的な部分をあからさまにしようとする彼の表現は、たとえば言えば、マグマが地表面に顔を出す寸前の「静けさ」というべきものであろう。それはまたあらゆる自然に対しても言えることである。密やかに溜めこまれていく内部エネルギー。それは見えないからこそ私たちの想像力を刺激する。そして、その気配に満ちた彼の作品の並ぶ、ヴンダーカマー（驚異の部屋）で私たちは安らぎを覚えるのだろうか、あるいは彼の透徹した目が持つ無意識の諧謔性にうろたえるのだろうか。

岡村 多佳夫（おかむら・たかお）／美術評論家